

「龍馬 最後の帰郷展」を見て  
—「中城家の離れ」を史跡指定に—

富田八千代 〈36回〉

＊学芸員の解説を聞きたくて

この企画展「龍馬 最後の帰郷—坂本家と川島家・中城家—」は『龍馬・元親に土佐人の原点をみる』(中城正堯著 2017年発行)の第1章に関する部分なので、ぜひ見たくまりました。見るなら学芸員の解説の聞きける日にと注目すると、11月26日と来年の1月14日しかありません。今回の企画展はどうしても解説を聞きたいことと1月は寒くなるからと、まわりに強調して一人で出かけました。



＊最後の帰郷潜伏がなぜ種崎だったか

展示は、「第1章 浦戸湾の歴史」から始まりました。紀貫之の頃(平安時代)から土佐国の海の玄関として重要な場所だったと展開していきます。これは、江戸時代の中城家につながることでした。

展示は以下の構成です。

第1章 浦戸湾の歴史

- 1 土佐の玄関口
- 2 山内氏入国以後の浦戸湾

第2章 龍馬の海へのあこがれ

- 1 坂本家と川島家
- 2 龍馬と中城家

(企画展冊子の表紙)

- 3 船への興味と世界への視点

第3章 倒幕に向けた最後の帰郷

- 1 倒幕にかかわる年表
- 1 亀山社中・海援隊を組織
- 2 大政奉還建白に向けた政局の動き
- 3 イカルス号水夫殺害事件
- 4 龍馬の武器購入
- 5 龍馬最後の帰郷
- 6 土佐藩の方向転換

時代を追った詳しい展示でした。展示の最後は「中城家の離れ」でした。帰郷の潜伏先がなぜ種崎だったのかを順に語りかけています。展示の仕方は程よく間隔がとられていて、見る者は次の話題への余裕が持てました。整然とした落ち着きを感じる展示です。坂本龍馬記念館の企画展への真剣さが伺え、いい加減に見てはいけないという気持ちになりました。(会場は撮影禁止でしたので、良さが映像でお知らせできません。)

＊解説は企画展の目的から

学芸員の解説で特に印象に残ったことです。

① 「中城家の離れ」を史跡として指定する意義

まず初めに、この企画展の目的を話されました。龍馬と川島・中城両家とのつながりを明らかにすることだが、それ以上に、「中城家の離れ」を史跡として指定をとの願いをこめているという意味のことを話されました。

この企画展の冊子の最後「終わりに」では以下のように書かれています。

(抜粋) <現在、この中城家の離れは当時のまま保存されており、ご子孫が管理を行っている。しかし、150年以上が経過しているため、老朽化が進み、個人で管理するには限界がある。高知市は昭和20(1945)年7月4日に空襲をうけており、龍馬が実際に足を運んだ場所で建物が残っているのは、高知市北西部の柴巻にある田中良助邸と、この中城家の離れの2か所だけである。田中家は史跡に指定されて修復・保存されているが、中城家

は史跡指定の検討がされたもの見送りとされた状況にある。>この時に見送りとされたのは公開が難しいから一つの理由だったと付け加えられました。このように、まず、目的を話されるとは驚きましたし、強く訴えるものがありました。この目的は、私の心にく「中城家の離れ」を史跡指定に>と、ずっと、問いかけてきました。

## ② 坂本家と川島家・中城家の関係

川島家と中城家のことは詳しく解説されました。龍馬の最後の帰郷に関係するだけでなく、中城家と川島家は少年期の龍馬に大きな影響を与えています。その以前から、この三家はつながりがありました。企画展の案内には「最後の帰郷で龍馬が果たした役割を考察すると共に、龍馬の人生に多くの影響を与えた川島家と中城家を紹介する。」と書かれています。

川島家は御船蔵の御用商人で富裕な廻船問屋。下関や長崎に販路を広げていたため、海外の情報に明るく、当主の猪三郎は「ヨーロッパ」というあだ名で呼ばれていました。川島家は元々、種崎浦の中城家の近くに建っていましたが、安政元年(1854)年に起った安政南海大地震以後、仁井田神社近くに住居を移しました。

おおまわりせんおふねがしら

中城家は大廻船御船頭でした。当主は中城助蔵(直守)で、龍馬が帰郷する頃は長男の亀太郎(直楯)が跡を継いでいました。この中城助蔵(直守)・亀太郎(直楯)親子や川島猪三郎は龍馬の父・坂本平八と兄・権平親子とは歌仲間として深いつながりがありました。

展示には、直守の詠んだ和歌の短冊が2点出ています。そして、紹介は続きます。中城直守・直楯親子は、歌人であると同時に、和歌の収集家でした。江戸時代の一流歌人の歌が多数収集されていて、中城家の人々の教養の深さを伺い知ることができます。中城文庫には和歌短冊およそ840点が残されています。

解説では、川島家には龍馬と姉の乙女がたびたび遊びに来ていたという伝承があるが、龍馬が12歳の時<弘化3(1846)年>に母が亡くなり、その後、継母が川島家から坂本家へ嫁いできたことから、12歳以後に乙女と共に川島家をたびたび訪問しただろうと、前置きがありました。そして、以下のようにまとめられました。

<龍馬は、川島家の当主からは世界地図をはじめ長崎から持ち帰った珍しい品々を見せてもらい、中城助蔵(直守)からは操船技術や船の仕組みを教してもらったのではなかろうか。そして、龍馬は、6歳年下の中城亀太郎(直楯・直守の長男)とも親しかったようだ。>



龍馬の海への憧れを育んだところでは。自ずと、最後の帰郷の潜伏場所として、<幼なじみの直楯を頼ったのだろう。>と『龍馬・元親に土佐人の原点をみる』に述べられています。この時、龍馬は33才、中城亀太郎(直楯)は27歳。直楯は、芸州藩船・震天丸まで出向きます。小舟に龍馬たちを乗せ種崎の中の棧橋に着け、裏の竹やぶから中城家へと密かに案内しています。

龍馬は入浴の後、「離れ」で休息をします。中城家は信用できる安全地帯です。倒幕に向けて大勝負に出ようと緊張続きのつか

の

(「中城家の離れ」中城正堯氏 提供) 間のくつろぎの時だったのでしょ。

早朝に種崎沖の芸州藩船・震天丸を直守が発見した時のことは直守の『随筆』に、中城家での様子は中城直正(直守の孫、直楯の長男、初代高知県立図書館長)が両親の中城直楯・早苗夫妻から聞き取ったことを綴った『随聞髓録』に記録されています。この時、早苗は妊娠5か月で、身ごもっていたのは直正でした。(注:展示の説明 <中城直守『随筆』九 慶應2(1866)年から明治元(1868)年 高知市民図書館「中城文庫」所蔵> <『随聞髓録』明治40(1907)年12月初旬 高知市民図書館「中城文庫」所蔵>)この二つの記録などから、中城家の人々と龍馬一行の様子が『龍馬・元親に土佐人の原点をみる』に詳しく書かれています。

解説を聞きながら、中城家の人達は龍馬の倒幕に向けての大勝負を支えたのだと思い知りました。この時の

表舞台には決して出てきません。裏で支えています。その人たちを企画展で取り上げられた、その意図が伝わってきました。

### ③ 後藤象二郎や土佐藩の動向と龍馬の奮闘

解説を聞く前に一通り展示は見終えていましたが、不勉強な私には、特に後藤象二郎との交渉が分かりづらかったのです。解説でかなり解けました。展示の手紙を示しながらの詳しい解説から、ライフル銃購入前後のことがとてもリアルに受けとめられました。龍馬の手腕と細かい采配・配慮、抜け目のなさに驚きました。両わきに木戸孝允と後藤象二郎を抱えての奮闘ぶりに抜群の能力や強い精神力を感じました。だから大勝負ができるのです。

展示では、龍馬の行動は11月11日に林健三へ出した書簡で終わります。その後、11月15日に京都近江屋において、中岡慎太郎と面談中のところを刺客に襲われ闘死(注:当館 2018年新訂版発行『案内図録』の龍馬略年表では「闘死」と書かれている。)します。この慶應3(1867)年までの数年間の龍馬の事をもっと知りたいと思いました。その意味では別の常設展示室で見た、乙女姉さんへ文久3(1863)年6月29日に宛てた5mに及ぶ長文の手紙は、興味深いものでした。この手紙の最後には、この企画展に登場しない妻お龍さんのことが書かれています。それも気にとまりました。

### \* 展示品の私の見所

#### ① 「中城家の離れ」の浮世絵張付けの襖

「離れ」と襖の写真は中城さんの著書に出っていますが、襖の浮世絵は色彩のあるものを見たかったのです。その襖の実物大のパネルが展示されていました。浮世絵は色彩豊かで、楽しく明るく賑やかな物ばかりです。念願がかない、しばらく見とれました。

展示の説明は、<龍馬が眺めた襖(パネル展示)江戸時代 高知市図書館「中城文庫」所蔵>と表示し、続いて「裏ノ部屋ニ休憩(雑踏ヲ避ケルナルベシ)、襖ノ張付ケヲ見居リタリ」と直正の『随分随録』を抜き書きしています。

<見居リタリ>から、龍馬が丹念に見ていた姿を勝手に想像してみました。(「中城家の離れ」の襖 中城正堯氏提供)

2枚の襖に3枚続きの浮世絵を6枚も張るとは大胆です。中城家では、江戸から浮世絵をたくさん持ち帰り土産としてかなり配ったそうです。きっと、「離れ」のように母屋のあちこちにも飾られたことでしょう。「中城文庫」には浮世絵が約60点も収蔵されています。

#### ② 直守の達筆さ

漢文で綴られた分厚い文書、『随筆』が展示されています。『龍馬・元親に土佐人の原点をみる』の冒頭の文章からは漢文とは伺えませんでした。後で、中城さんにお聞きすると、漢文は公文書を写した引用部分で、直守の文章は和文だそうです。私が展示を正しく見ていなかったことが分かりました。それにしても、とても上手で美しい文字です。その達筆さに驚きました。そして、隣の展示は、直正の『随聞随録』で覚書とあります。この文章は、書き加えたり筆で斜線を引いたり、ぐっと今風です。そのアンバランスに、ますます、直守の文字の巧さが目立



ちました。直守の和歌の短冊からも仮名文字の達筆さが分かります。

### ③ 年表から薩摩・長州・土佐藩と龍馬の関係が分かる

展示〈慶応3年(1867)5月～10月 倒幕に関わる年表〉は、土佐・薩摩・長州と龍馬の4項目分けて5月17日から10月30日までの出来事が一覧表になっています。とても分かりやすく、各藩とのかかわりで龍馬の活躍をかなり整理できました。

### ④ 展示品の多くが「中城文庫」 「種崎全図絵図」から当時のことを知りたい

展示資料の26点中17点が「中城文庫」からでした。「中城文庫」の所蔵品は約1万点にも及びますが、オーテピア高知図書館では簡単に閲覧はできません。そのほん一部ですが真物やパネルを見ることができたことは幸いでした。

「種崎全図絵図」(近代 高知市民図書館「中城文庫」所蔵)を眺めているうちに、展示の仕方で注文をしたくなりました。「種崎全図絵図」を活用して、龍馬が小舟から下りた中の棧橋や直守が沖を見た場所や中城家の場所を示して欲しいと思いました。種崎での道程は短いのですが、龍馬の歩いた所に関心を持っています。別の「御船倉」(『図録 高知市 考古から幕末・維新篇』より転載)では、舟や松の木や建物がたくさん描かれています。これだけ描かれているのはとても広い一帯でしょう。「種崎全図絵図」の二区の辺りでしょうか。そうすると、二区はとても広いということになります。種崎を全く知らないので見当が付きません。今の種崎に重ねるとどこになるのだろうか興味を持ちました。地勢とは別に、中城家の母屋や庭はどんな様子だったのだろうか色々な興味もわきました。

### \*展示の締めくくりは2枚の襖

第3章「土佐藩の方針転換」の展示の説明は、〈龍馬らの乗った芸州藩船・震天丸は、慶應3(1867)年9月23日朝、浦戸湾沖に到着した〉で始まり、〈そして、10月早々には、出兵をにらんだ藩兵の編成が開始されたことを考えると、龍馬の大勝負は成功したといえる〉で終わります。長い説明の文章には、一言も中城家や「離れ」はでてきません。この時、「中城家の離れ」は大事な場所であり、中城家の人々は一生懸命お世話をしています。「離れ」の襖はそのことを語りかけています。学芸員の解説を聞いたから、そう受けとめることができました。

ここで、『龍馬・元親に土佐人の原点をみる』の最初の部分の文章を紹介してもいいのではと思いました。著者は中城家の方です。この企画展にぴったりの内容です。展示そのものは、ずっと、当時の史料そのものですから、ちょっと異質になるかもしれませんが、著書だけでなく解説の中に中城文庫の紹介は欲しかったと思いました。中城文庫は、ただ中城家の出来事に留まらない貴重な史料だと実感しました。企画展の冊子の裏表紙には、中城正堯氏が協力者として個人ではお一人だけ名前が出ています。

解説とともに展示を見終え、学芸員が最初に話された〈「中城家の離れ」を史跡として指定し保存を〉に結びつけました。展示の中には、その文言はでてきませんが、展示がその重要なことを伝えています。

ついでに、当館地下の図書室の書棚には『龍馬・元親に土佐人の原点をみる』がありませんでした。(見落としのかもしれませんが、貸し出し中かもしれません。)今回の企画展にはうってつけの参考書です。ぜひ配架をと思いました。

### \*子どもたちが「龍馬を学ぼう!遊ぼう!」ができる場所を

#### そして、屋上から太平洋と種崎をみたい

高知県立坂本龍馬博物館へは初めて行きました。しかも、数時間展示を見ただけで全体は分かっていないのですが感じたことがありました。当館の施設・設備・展示から、坂本龍馬に対して真摯に向き合う姿勢が伺えました。龍馬を茶化したり変に派手にしたりはしていません。一方、小学生以下の子どもが見学したら、難しくて飽き

はしないだろうか心配になりました。ところが、子ども向けのパンフレット・「龍馬<sup>りょうま</sup>を学ぼう！遊ぼう<sup>あそ</sup>！」がありました。分かりやすくまとめられています。すべてに読み仮名が付いているなど配慮されています。「龍馬ってどんな人？」の項は、盛りだくさんなことが端的にまとめられています。「龍馬の物語」の項は少し不満です。＜1歳「龍馬、誕生！はなたれ、泣き虫時代」＞の見出しで子どものころをまとめ、次は＜19歳「剣術を習うために江戸へ！＞ととなっています。今回の企画展に当たる部分、川島家と中城家と交流したであろう龍馬の少年時代が全く抜けています。龍馬が色々学び海への憧れを抱いたに違いないこの時期を見学に来た子ども達に伝えるべきではなでしょうか。また、龍馬の幼少の様子をくはなたれ、泣き虫＞ということには異論を聞いたことがあります。パンフレットだけでなく、「龍馬を学ぼう！遊ぼう！」が思いっきりできる広い場所があるといいと思います。(あるかもしれません。) 掲示や史料を見たり作業や遊びなど身体を動かせたりできる場所です。

一番、残念だったことは、屋上に出られなかったことです。エレベーターの表示は＜屋上 展望台＞でしたが、ドアが開いたら、目の前に立ち入り禁止の表示と柵。(何か理由があったのかもしれませんが。) 桂浜の龍馬像のように、広い太平洋を一望しようと期待していたのです。浦戸城のことがよく分かっていないのですが、浦戸城址に建っている当館の屋上からは種崎はよく見えるのではないのでしょうか。見えなくても近距離ですから、「中城家の離れ」の位置を提示したら、史跡指定のアピールにもなるでしょう。

#### \* 早く史跡に指定を

11月26日に、バスを降り、坂本龍馬記念館へと浦戸城址の坂道を上る時は、龍馬の最後の帰郷のことをもっと知りたいとの思いでした。ところが、帰りにその坂道を下る時には、心の中は「中城家の離れ」を史跡指定にとの願いでいっぱいになりました。(注: 当館とバス停間は700mの案内板。坂道の連続。しかも、かなりの勾配の箇所も。シンドカッタ！)

この企画展で願うように、「中城家の離れ」の史跡指定の重大さを実感しました。移築ではなく、150年以上居続けた現在の地で、「離れ」に刻まれた歴史を、ずっと語って欲しいと思います。その周辺は、当時と異なり、龍馬たちが小舟から下りた浦戸湾の浜辺は埋め立てられました。大政奉還という歴史に残る名案を土佐藩に働きかけた足場の「離れ」は、今もなんとか健在なのです。ここから、龍馬が描いた平和な政権移譲の構想が土佐藩をも動かし、実現への道をたどり始めたのです。しかも、この「離れ」は、建物だけでなく1万点にも及ぶ膨大な史料・中城文庫を持っています。貴重な歴史の証人です。種崎には、他に龍馬にまつわる場所や物は無いのでしょうか。浜辺とか、大きな松の木とか、船倉とか。あれば、そのような物にも注目してほしいと思います。龍馬が実際に足を運んだ「中城家の離れ」が今なお健在で建っている地域一帯は、幕末の歴史を語る場所ではないのでしょうか。県立種崎千松公園の隣の「中城家の離れ」一帯が、人々の意識の中でも公園と地続きのお隣どうしになるといいと思います。

一刻も早く、「中城家の離れ」が史跡に指定されて修復・保存されることを願います。

＜付記＞お願い

学芸員の解説の聞き落とし、聞き間違い、勘違い、理解不足が多々あることでしょう。また、展示にしても然りです。感想を書くにあたって、「龍馬 最後の帰郷—坂本家と川島家・中城家—展」の企画に

当られた方々に確かめたわけではありません。一個人の一面的な感想です。ご了承ください。